



Title	大阪府立母子保健総合医療センター：四つ子誕生
Author(s)	竹村, 喬; 光田, 信明; 大迫, 郁子 他
Citation	大阪公衆衛生. 1986, 50, p. 2-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83948
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

施設訪問インタビュー 大阪府立母子保健総合医療センター

～ 四 つ 子 誕 生 ～

★ 大阪府立母子保健総合医療センター

竹村 喬 病院長

光田信明 医師

大迫郁子 婦長



インタビューー

大阪市環境保健局保健指導課主査

中井美恵子

昨年8月21日、和泉市にある大阪府立母子保健総合医療センターで四つ子が生まれ、現在4児とも順調に成長しています。

この四胎児の出産にあたったスタッフの方の苦勞話を、竹村病院長、主治医の光田医師、大迫婦長から聞かせていただきました。

中井 府立母子医療センターは56年10月にオープンした新しい施設ですが、その特徴は？

竹村院長 当センターは、妊婦から幼児期までの一貫した周産期医療を目的とした施設で、全国でも初の試みです。

周産期第1部(産婦人科)、周産期第2部(新生児科)、周産期第3部(乳児科)、周産期第4部(母性内科)、の4部門からなり、さらに小児医療施設を増設する計画もあります。

中井 昨年の8月に、当センターでは初の四つ子が誕生したそうですが、当センターの多胎出生例についてお話しいただけませんか。

院長 先日三重で全国5番目の五つ子誕生というニュースを見ましたが、当センターでは三つ子は年間2～3例ずつありますが、四つ子は昨年の8月21日がはじめてでした。

一般に多胎児妊娠の頻度には $\frac{1}{80^{n-1}}$ という

計算式があり、四つ子の確率は $\frac{1}{80^{4-1}}$ 、つまり $\frac{1}{512,000}$ ということになります。

三つ子は、 $\frac{1}{80^{3-1}}$ で $\frac{1}{6,400}$ ということですね。

中井 大阪市での三つ子出生例を昭和54年から59年までを見てみますと、54年が2例、55年1例、56年3例、57年2例、58年1例、59年1例、となっていました。

院長 大阪市の年間出生総数3万から計算すると、年間4～5人位生まれてもいいはずですが、流産など、出生に至らないケースが多いのでしょう。

妊娠、23週で緊急搬送

中井 排卵誘発剤を使用しての多胎児出産の例をいろいろ聞きますが、このたびの四つ子ちゃん誕生の経過などお聞かせください。

院長 このお母さんは27歳で、不妊症ということで過去にも薬を使って妊娠し、失敗を経験されている方でした。今回も排卵誘発剤を使用されており、妊娠19週で阪大病院に入院し、7月25日、23週で当センターへ搬送されてきました。

なぜこの例が、私達にとって貴重な経験になったのかと申しますと、当センターに搬送

されてきたとき、すでに子宮収縮が頻繁となっており、破水感があったりで、いつ生まれても不思議でない状態であったのに、それから8月21日まで50日間も妊娠を継続させることが出来たということです。今までなら倒底もたないという常識をくつがえし、生児を得たというところに大きな意味があると思っています。

中井 母子救急といいますか、分娩トラブルが生じた場合に、専門施設に移送しても手遅れになることが少なくないと聞きますが、今回の四つ子ちゃんの場合には、医療機関どうしの連携が非常によかったということですか。

院長 阪大病院から送ってもらったタイミングがよかったと思いますね。これは日頃から、医師の研修を含め接触が多く、相互の施設の機能や設備について理解しあっていたからでしょう。

中井 23週で緊急搬送されてから31週までのご苦勞を聞かせて下さい。

院長 まず人工呼吸機、保育器など、必要な物品・資材の確保にあたり、プロジェクトチームをつくって、全センター的な協力体制をとりました。

緊張の連続 24時間気配り

中井 センター内の各科の協力は、具体的にはどの様な状況だったのでしょうか。

院長 関係スタッフ間で常に待機する者を置き、院内に随時四つ子情報を流したり、オンコール体制や看護婦等担当者の外出禁止などの手だてをとりました。ことに入院当初は、周産期第1部、周産期第2部では全員が待機姿勢をとっていました。今から言えばみんなよく頑張ってくれたと思いますよ。

中井 その頃の院内の雰囲気はどんな様子でしたでしょうか。

光田医師 阪大病院から送られてきたとき、

いつ生まれても不思議でない状態だったので、毎日が緊張の連続でした。主治医である私達は、12時間交替で、観察の毎日が続きました。もつかなァ、出たらどうしよう、という気持ちが誰にもあって、一生懸命でした。

中井 その後の経過は？

光田 32週を目標にして妊娠継続に主力を注いだ結果、8月初旬には妊娠継続に明るい希望が出てきました。本人も絶対安静をしっかりと守られたし、いろいろな薬を使用しましたが、幸い副作用も出ませんでした。

気持ちが高ぶると下腹部が張ってくるという状態でしたので、児心音も慣れた主治医が手早くするなどいたしました。暑い夜は眠れないといってイライラしたりするので、24時間の気配りを一同が心掛けました。

中井 50日間絶対安静の妊婦さんの心理について、どういう接し方をなさっていたのですか？

光田 患者に不安感を与えないように気を使いました。トイレについても、「行きたくなったら知らせて下さい」といった対応ではダメだということで、常に妊婦に密接した大変きめの細かい看護がされました。

妊婦も不安が強くて「こんなやつたら、早く出してほしい」と弱音をはく状態でしたが、スタッフの気持ちはよく伝わっていたと思います。でも、一番の励みになったのは、ご主人の応援と協力だったと思いますね。

全スタッフ協力で無事出産

中井 そしていよいよ、お産ということになるのですね。

光田 初めから、32週になったら帝王切開をしようと話していたのですが、31週の8月20日突然破水し、2～3分に1回の陣痛が到来し、子宮収縮も強くなって、これ以上早産防止は不可能という判断で、深夜の帝王切開ということになりました。24時間待機で、

産科医、小児科医、外科医、麻酔医、看護婦、助産婦がいつでも分娩に立ち会える状態にしてあったことが大きな力となりました。

院長 深夜のお産であるにもかかわらず、各部門の担当者がみごとに協力し、無事に帝王切開が行なわれ、NICU（新生児集中治療部）に赤ちゃんが移されたのです。全員が大変機敏に働いてくれました。

中井 すばらしい分娩管理に支えられて誕生し、順調に成育して、9月にはもう退院することが出来たのですね。

院長 これだけ全スタッフが協力し、奇跡的に生児を得ることができたのですから、4人共、健康に育てなくてはと、幾度もスタッフ会議を開いて研究しました。そして、9月29日に第2子と第3子が元気に退院し、つづいて第1子も10月7日に、第4子が10月21日に退院しました。お母さんが育児の手順に慣れた頃を見はからって、4人を次々と自宅へ帰したのです。

周囲のお母さんを勇気づける

中井 四つ子ちゃん誕生など、小さな赤ちゃんが生まれ元気で育っていくことが、周囲のお母さん達には明るいニュースになったことでしょうね。

光田 たしかに、まわりの未熟児をもったお母さんたちも勇気づけられたと思いますよ。



大迫婦長 そうしたお母さんが同室だったりすると、自然にいろんな相談をしあっているようです。

ことに低体重児は比較的長期に入院している方が多いので、お母さんたちも来院の都度、見舞ったり見舞われたりで、非常に仲よくなる方が多いようです。そして退院後も、育児相談をしあったりしているようですよ。

伊藤 保健所への連絡や退院の知らせなどは、医療看護スタッフで書かれるのですか？

大迫 入院中の母子の観察や指導した事項を私達が記入して保健所に送付しております。授乳のし方、沐浴のさせ方、感染防止など、詳細な記録も送付しております。

中井 たしかにいただいております。そして家庭訪問に行きましたら、今度は訪問の結果報告書を記入してセンターに返送しております。

中井 発達や成長について、標準のラインにそろうまで、定期健診が必要と思いますが？

光田 これからの長い期間の健康管理が必要だと思っています。予防注射のスケジュール等年齢を追って観察がいるでしょう。

院長 いずれにしても、今回のつ子誕生は、医療機関の連携、高度医療、家族の協力があってはじめて成功したといえますね。

今後は、4人の子供たちがすこやかに育つよう、私達と保健所が協力してフォローアップしてゆかなければならないと思います。

よろしくお願いします。

中井 今日は、どうもありがとうございました。

インタビューを終えて

四つ子の出産というと、病院のほうのご苦労もさることながら、お母さんやお父さんも大変だったろうと思われます。そして、退院後の家庭での育児がうまく行われているのかということも心配になってきます。そこで、

生野保健所の島田保健婦さんに電話で問い合わせたところ、次のような嬉しい返事が返ってきました。

『4人ともスクスク育って、早い子はもう這いはじめています。それぞれ個性も出てきて面白いですよ。私たち保健婦は、去年の退院直後は10日か2週間に1回は訪問をしていましたが、今年の1月からは1月に1回でいようになりました。』

お母さんとおばあちゃん（ご主人の母）が2人ともしっかりした方なので安心です。周囲の人が「大変でしょう」と言っても、お母さん自身は「いいえ、何も大変なことない」と、育児を楽しんでいる感じなんです。

このお母さんは、いつの間にか相談相手になる友達をつくってしまいます。入院中に同室だった人とか、三つ子のお母さんとか…。以前に四つ子を育てたお母さんから使用ずみ

の2人乗り乳母車を贈られて、いま2人ずつ隔日に散歩に連れて出ておられます。

母子保健センターには、お母さんが毎月2人ずつ連れて行って（つまり各児が隔月に）診察を受けているのですが、お誕生が過ぎれば、もう定期的に行かなくてもいいそうです。

センターからは、私たち保健所の保健婦に、出産前から連絡がありました。それ以来ずっとセンターのお医者さんや保健婦さんには必要なことを連絡し、助言をしてもらっています。』

電話でこう話してくれた島田さん自身が、2歳児のお母さんだそうです。訪問する人とされる人との間にも、若いお母さん同士の暖かい交流がそでっているのでしょう。

家族と病院と保健所と、3者の間の連携プレーが見事だと思いました。

四つ子ちゃん万歳！

大阪府立母子保健総合医療センター 施設見学を終えて

昭和61年7月8日午後、公衆衛生協会の企画で大阪府立母子保健総合医療センターの施設見学が行われ、当日参加された保健婦さんたちより、次のような感想が寄せられた。

- 母子センターは身近な医療機関であるが、府立として重大な使命を担っていることがわかった。
 - 医療のみ優先でなく、人間味も合わせもっていることが感じられた。
 - 小児病院とは雰囲気的にもずいぶん違い、周産期のみにしぼられた専門病院だという印象をあらためて強く持った。
 - 看護婦さんも若いばかりで、若くて独身でないととても勤まらないくらいハードな職場だと思った。
 - 保育器の中で一生懸命生きている生命の背景にさまざまな社会的問題があることを知り、母子センターでの医療のむずかしさを知った。
 - 母子センターでの医療、看護および入院している児の両親のセンターに対する気持ちを知ることができ、退院した児への訪問に際し役だつことができるであろう。
- 今後も公衆衛生協会では、会員の希望にそった施設見学を行う予定である。